

川越のサツマイモ資料館の20年

元サツマイモ資料館長 井上 浩 (Inoue, Hiroshi)

基盤は川越いも友の会

太平洋戦争前のわが国にはサツマイモの資料館はなかった。それが現れたのは戦後で、その最初は岡山県の「笠岡市立いも博物館」であった。笠岡市は「いも代官」として知られる井戸平左衛門の終焉の地である。

そこに「いもの辯さん」でとおっていた渡辺辨三翁がいた。サツマイモのことに没頭した人で、その執念が実を結んだものであった。開館は1952年（昭和27）。洋風木造2階建て、180㎡。初代館長にはすでに84歳になっていた辯さんが、自ら就任した。だが10年しかもたなかった。辯さんが在職のまま94歳で亡くなると、そのまま消えてしまった。

次にできたのが埼玉県川越市の民営館「サツマイモ資料館」であった。川越地方は江戸時代からサツマイモの特産地であった。ところが戦後はいも畑が激減してしまい、昭和の後期には産地とは言えなくなっていた。

それに危機感を持ったのが川越市福原公民館の主事、山田英次さん（1952年生まれ）であった。このままでは「川越いも」に関わる諸文化さえ、記録を残さずに消えてしまう。いまなんとかしなければ、取り返しのつかないことになるとして企画したのが、勤務先での「さつまいもトータル学講座」であった。1982年（昭和57）のことで、内容は川越いもの歴史・民俗、伝統的栽培法、川越のいも菓子・いも料理などで講師は10人ほど、受講者は40人ほどであった。

それが好評であったことから、山田さんは講座終了直後に講師陣と受講者を母体とする「川越いも友の会」を立ち上げ、事務局を引き受けた。同会の活動は最初から活発であった。畑を借りてのサツマイモ栽培、いも菓子・いも料理の作り方講習、シンポジウム・いも祭りなどの開催、そしてサツマイモ関係の諸パンフレットの作成と配布などがその主なものであった。

それをバックアップしてくれたのがマスコミであった。そこがこぞってその諸活動を取り上げてくれたので、たちまち「川越いも友の会」ありとなった。おかげでそこにさまざまな人が、サツマイモ関係資料を持ってきてくれるようになった。会もそれを大きな催しのたびに会場に飾ったので、それが呼び水になったようである。資料の寄贈者がますます増え、やがて置き場所にも困るようになった。そうすると、それを特別の日だけでなく、普段の日にも見てもらいたくなるものである。「それができる場所があればいいな」が、やがて「資料館を作りたいな」となった。

といってもそれには大金が要る。建設費だけでも大変なのに、開館後の運営費も考えなければならない。市民有志のささやかな会にとっては荷があまりにも重すぎた。

ところがその難題を、ひとりで引き受けようという人が現れた。友の会会員の神山正久さん（1954年生まれ）が、「うちの店の敷地の中でも良かったら、それを建ててもいいよ。費用は自分が全額出す。運営費も持つよ」と言ってくれたのだ。

神山さんは川越ほどの「いもの町」に、サツマイモ料理専門の店がひとつもないのはおかしい。だれもやらないのなら自分がやるしかない、「いも膳」という名のそれを開いたほどの人である。それだけではない、川越にサツマイモの資料館がないのもおかしいと、いつも思っていたのだという。おかげで、一挙に和風木造2階建て、120㎡、入館無料の「サツマイモ資料館」が誕生した。1989年(平成元)の春のことで、それは「さつまいもトータル学講座」から7年後のことであった。

サツマイモ資料館に勤めてみて

資料館の職員は最初から館長1名だけであった。その初代館長になったのは建物の設計段階から関わった山田さんで、同氏にとっては公民館職員を辞めての就任となった。ただ在任期間は短く、1989年春から1992年(平成4)春までの3年間であった。

その後を継いで2代目館長になったのが筆者である。わたしは埼玉県公立高校の社会科教員であったが、40歳頃から余暇を川越いもの研究に当てるようになった。仕事は思うようには、はかどらなかったが、それでも「さつまいもトータル学講座」開講の頃には、講師のひとりとして参加させてもらえるまでになっていた。その縁で友の会の発足当初からの会員として活動できたし、それをとうして自分の「サツマイモ学」も深めることもできた。

そのわたしにも、定年の時がきた。ちょうどその時、山田さんが退任することになったので、その跡を継ぐことになった。

サツマイモ資料館は開館当初から入館者が多く、わたしの代には年に2～3万人にもなっていた。地域別では東京都民が7～8割の感じで、あとは首都圏諸県の人が目立った。少数ではあったが北は北海道、南は沖縄からもきてくれたし、諸外国からもきてくれた。

性別では女性が圧倒的に多く9割の感じで、そのサツマイモ好きを見事に証明していた。男性は仕事でくる人が多かった。サツマイモの特産地の個々の農家や農協などの団体、市町村などの地域おこしの関係者、食品関係の企業関係者、農業試験場などの研究者などであったので、逆にこちらが教えてもらうことが多かった。

年齢別では若いほうの代表は総合的な学習でくる小中学生で、夏休みにどっときた。変わったところでは卒業論文のことで相談にくる大学生が毎年5～6人はいた。

一番多いのは中年の主婦層で、その栄養関係のことについての知識は深く、ヤラピン、アントシアニン、カロテン、食物繊維などという言葉をはんぱん使っていた。

高齢者も目立った。戦争による食糧難時代をサツマイモがあったおかげで生き延びることができた人たちで、そのことへの感謝の気持ちを表したい。でもどうしたらいいのかわからない。それでここへ来てしまったという人が意外なほど多かった。

前任の山田さんによると来館者が一番喜ぶのはサツマイモそのものであるという。それで最初から新旧さまざまな「なまいも」を展示品の核としていた。わたしも同感でその収集と展示に努めた。

常設展示の基礎は山田さんが固めてくれていたので、それを踏襲させてもらうこととし、こっちは年に2～3回の特別展に力を入れた。その中で特に反響が大きかったのは1995年(平成7)の「戦争とサツマイモ」と、それから10年後の2005年の「サツマイモ伝来400年記念展」であった。

わたしは1931年(昭和6)生まれなので、戦争による食糧難を、体をとうして知っている世代のひとりである。それだけにそれを後の世に伝えなければならないという使命感のようなものがあり、前々からそれ関係のサツマイモ資料を集めていた。

1995年は戦後50年ということで、それに

ちなむ諸行事が全国各地でおこなわれた。当館もそれに呼応する形で「戦争とサツマイモ」展をやったところ、マスコミにも注目され全国的に報じられた。なかでも読売新聞は「編集手帳」(1995・12・7)と「顔」(1995・12・21)で大きく取り上げてくれた。

わが国に最初にサツマイモをもたらしてくれたのは、沖縄本島の野国村(嘉手納町)出身の野国総管で、江戸時代初期の1605年のことであった。2005年はそれから400年になるということで、嘉手納町では50年に1度という特別盛大な「野国総管甘藷伝来四百年祭」をおこなった。

そこでこっちは、その記念展をおこなった。当館も開館以来10数年たち、資料も収納場所がなくてこまるほど増えていた。その中からぜひ見てもらいたいものをえりすぐって並べたので、自分で言うのもおかしいが見ごたえのあるものになった。

この年はわたしにとって嬉しいことが重なった。ひとつは嘉手納町の野国総管甘藷伝来四百年祭実行委員会から「野国総管甘藷功労賞」をいただいたことであった。理由は多年にわたるサツマイモの文化史の研究とサツマイモの普及啓発活動に精励したということであった。当館での活動がそのまま認められたわけで、嬉しかった。

もう一つは川越市がサツマイモ伝来400年記念行事として「さつまいもフォーラム」を開催してくれたことであった。わたしはその基調講演を頼まれ、「サツマイモの歴史と川越のいも文化」という話をさせてもらった。

閉館

2007年12月のことであった。資料館のオーナーである神山さんから「こんなことを言っでは悪いが館長にもしものことがあったとき、ここにある諸資料をどう始末したら良いかわからない。館長が元気なうちに移管先を探してもらいたい。資料館は

来年3月で閉館する」と言われてしまった。

突然のことであつたのでびっくりした。でも言われてみればすでに76歳になっていた。老館長ひとりで、あらゆることを切り盛りしていた笠岡市立いも博物館の終末を思えば、残念だがそれも仕方がないことかなとだんだん思えるようになった。

当館の資料は年々増えつづけ、3千点を超えていた。その自慢は、ほとんどが全国各地の人びとからの寄贈品で、買った物はいくらかないことであつた。それはサツマイモを愛する全国の人びとの好意のかたまりであつた。それだけに移管先はどこでも良いというわけにはいかなかった。

閉館の噂が流れると、川越市内だけでなく市外からも資料をそっくりもらいたいという話がいくつもきた。わたしはそれに対し、ここの資料は川越だからこそ集まったものであるから、川越に一括して残す。それも死蔵ではなく、活用してくれるところでなければならぬとした。

そうなるに適當なところは川越市立博物館しか浮かばなかった。ここなら公立であるし学芸員もいる。本格的な収蔵庫もある。

サツマイモ関係の常設展示スペースも、わずかではあるがあることはある。事情が急変したとなれば、その拡張も考えてくれることであろう。

2008年の2月に川越市立博物館へ移管のお願いにいくと、こちらの希望を快く受け入れてもらえることになり、ほっとした。こうして川越のサツマイモの資料館も20年で消えてしまった。

それはそれとして神山さんはどこからも1円の補助金ももらわず、私財を投じボランティアのつもりになって当館を維持してくれた。それがわが国のサツマイモ文化の高揚に役立ったことは明らかである。神山さんと、その事業の基盤を築いてくれた山田さんの功績をたたえたい。